

大学の授業におけるリコーダーのグループ学習に関する研究
—「楽しさ」をコンセプトとして—

茨城大学教育学部 山口 文子

A Study about Group Learning of the Recorder in a University Class
—“Pleasure” as Concept —

大学改革の流れの中で授業改革を捉え、今までの授業を振り返りつつ、その改善を探った研究。具体的にはリコーダーのグループ学習の中で、「楽しさ」をコンセプトに学生の自主的な参加を模索し、今後の展開を検討している。はじめに、(1)今までの授業の反省、(2)私の授業改善、(3)検証的考察、(4)今後の展開、の順で検討している。

キーワード：大学	university
授業	class
リコーダー	recorder
グループ学習	group learning
楽しさ	pleasure

はじめに

大学改革の様々な流れの中で、学生からの点検、評価、また教員の側からも点検、評価が入り、ともすれば象牙の塔の中での、自己満足的な授業展開の可能性が指摘されてきた大学の授業にも、メスが入りつつある。筆者は教員養成学部において、小学校の免許取得のために、初等音楽科の授業を担当している者であるが、特に音楽科専攻以外の学生の実技—歌唱指導、リコーダーなど—について学生が楽しく参加しつつも、実際には知らず知らずの内に実技の基礎から学ぶことができ、音楽教育の立場からも有意義な授業が展開できないか、と考えていた。そんな中で同じように、大学で実技を担当する他の教官としての立場から、また学生からのレポート、アンケートを含めて生の声を聴くこと、筆者自身の授業評価、他の学校（小・中・高を問わず）の授業参観などから、教師中心の一斉授業一辺倒からの脱却を目指して、手探りではあるが筆者なりの授業の改善を進めてきた。本稿は、「初等音楽科教育法」という極めて限定された授業を対象としており、まだ始めたばかりにすぎない授業改善であるが、その一端を示すことによって、同じように授業に取り組む人に、同じ立場からの一つの参考例を示すことができればと思い、拙い実践例であるが検討することにした。その際、こういった実技を伴う教科の常として、教師のカンやコツに委ねられる部分の多いことが指摘されてきたことをふまえて、筆者はカンやコツの根底にある普遍的な部分、科学的、実証的に証明できることの把握を目標に検討を進めていくこととしたい¹⁾。具体的には(1)今までの授業の反省、(2)私の授業改善、(3)検証的考察、(4)今後の展開、の順で検討することとする。

(1)今までの授業の反省

茨城大学教育学部では小学校の免許取得のために、音楽科においては主に第2学年で履修する鍵盤楽器、歌唱、鑑賞など小学校音楽科の実践を主な授業内容とする「初等音楽科内容研究」と、さらにこの授業を学んだ学生のために、主に第3学年で履修する小学校音楽科の理論とリコーダーを主な授業内容とする「初等音楽科教育法研究」の2種類の授業が用意されている。筆者はこれらの授業を担当していて、学生がもっともっと楽しく、なおかつ演奏としてはもっと自由自在に演奏ができないものか?と思うようになっていた。というのは教師として忘れられない一つの経験があったからだ。

その頃は、授業とはいっても、どちらかと言えば一斉授業中心、教師中心の教え込む授業も取り入れており（限られた授業時間では、その方が多くの内容を効率的に消化できることもあるように見えた。）、学生もそれに喜んでついてきている、と思っていた。実際にその時までは人前であっても、歌を歌ったり、リコーダーを演奏したりが、滞りなく行われていたのだった。

それは、幼稚園の免許取得のために開講している「保育内容の研究」の授業でおこった。一通り幼児の音楽教育の基礎についての説明をし終わった後で、子どもの歌を何曲か歌い、「さあ、皆さんも先生になったつもりで、この曲の指導をしてみましょう。」との言葉かけで、一人の学生を指名した。しかしその学生は、頑として教官の言葉を受け付けず、歌うどころか席から立ち上がることもなかった。理由は簡単、「人前で歌ったり、演奏したりすることはいやだ。」ということであった。結局かなり筆者は気分を害したし、授業もその場で大袈裟な言い方をすれば一時中断という惨事にも見舞われた。しかし、結局辛うじて気を取り直し、他の学生を指名するなどして切り抜けたように記憶する。一方頑として受け付けなかった学生もそのままにはできないので、「じゃあ、あとで先生の前だけでやってみましょうね。」の一言をかけてみると承諾して、本人はいたって嫌がる様子もなく、後日であるが、極めて上手になおかつ楽しげに、課題を研究室のピアノを弾きつつこなしていった。

この事件（筆者にとっては大きな事件であった。）は筆者に大きな疑問を投げかけた。この事を聴いた（筆者はあまりに印象に残ったので相談してみた。）同じく大学で音楽の教鞭を執っている教官の「いつ、いかなる時でも先生は生徒の前でニコニコとしていなくてはなりません。仮に単位をあげないとしても、ニコニコとしていることが大事なのです。」という言葉も心に残っていた。ニコニコすることが大事とは何を意味しているのだろうか……。ひょっとして授業における「楽しさ」について言っているのではないだろうか？筆者自身は人前で演奏することは嫌な方ではない。むしろ無意識に「楽しく」歌ったり、演奏したり、踊ったり(?)している方である。人前で演奏する事が嫌だというのも、驚きであるし、第一大きなショックであった。学生が「嫌だ」ということを筆者は、どうしてもニコニコとして見ていることはできない。両者が楽しくなければ本当の「楽しさ」は存在しないからである。何とかしなくてはならない、どうしたら学生が「楽しく」演奏に取り組むことができるのか？筆者の中に、自分の授業を改善していこうという気持ちがむくむくと沸き上がったのもこの時からであった。また「初等音楽科教育法研究」の授業を始める前に行うアンケートの中に人前で演奏することが嫌だという記述が大体全体の1割弱程あるのも気になった。

折しも平成10年をむかえ、小学校の学習指導要領の新しい版が告示された。その中では音楽科における「楽しさ」が、目標の中で第1学年から第4学年まで指摘され、また内容の部分でも児童自身が楽しむことが強調されていた。「楽しさ」は筆者の知らぬ間に、今までにない形で、新指導要領の眼目となっていたのであった²⁾³⁾¹¹⁾。

さて、ここで取り上げようとしている「小学校音楽科教育法研究」の中でのリコーダーの指導について反省のきっかけとなった学生の言葉がある。筆者が黙々と、リコーダーの課題となるテキストに基づいて一斉授業をしていた時であった。リコーダーの演奏の姿勢から入り、呼吸法、タンギング（舌の使い方）の指導は段階を踏んで、整然と技巧的には充分に進んでいった。でも筆者はあまりにも「楽しくない」ので、「楽しくないね、どうしたらいいかな？」と学生に問いかけた。すると、「小学生の頃、リコーダーの曲が進むごとに先生に金の星をもらっていた。金の星をたくさんもらって、おれはリコーダーすごく得意だった。」と学生は「楽しそうに」答えた。もちろん筆者の問いには正面からは答えていないかもしれない、しかしこの答えには沢山のヒントが隠れているように思えた。大学の授業で金の星のシールをあげることはできないけれど（あげていらっしゃる先生もいらっしゃるかもしれないが・・・）、何か金の星に替わる物はないか？金の星に替わる、何か「楽しく」授業を促進させてくれるものを筆者は探すことになった。苦しくとも頑張ったり、努力したりするばかりでなく、「楽しく」感じられる「何か」を授業の中心に据える、これが音楽科教育の重要な側面であると考えようになった。授業をダイナミックに展開させる「何か」を掴む、これが「楽しさ」と関係しないだろうか？「グループ学習がしたいな。」学生の独り言も筆者の耳に残った。以上極めて個人的なおかつ、偶発的な体験に思えるかもしれないが、この奥に隠れている（と筆者には思われる）、音楽科教育にとって普遍的とも言える大きな問題点を解決すべく対策を練ることにした。筆者は数ある問題点を、大きく以下に示す3点に絞って考えることにした。

①音楽科教育には必須と思われる人前での演奏に対する嫌悪感をなくし、むしろ快感として感じられる、「楽しく」感じられる指導法を編み出せないか？

②音楽科の中で「楽しさ」を追求するといっても、「ふざけ」とは区別し、やはり教科である以上の教科の目標なり、どうしても体得しなくてはならない基礎、基本があるはずである。それを「楽しく」体得できないものだろうか？その際に、できれば学生自身の自己評価、他の人からの評価を組み入れつつ、最終的には自分自身で自分の演奏を最良のものにしていく、そして欲を言えばその演奏が学生自身の心を育み、生きていく上での支えの一つとなるような個性的な（あたりまえだが）何かにまで高まる可能性を示唆するものを形成できないか？

③演奏を指導するとは言っても、立派な教育的行為である。学生自身の心の発達に寄与し、自信をつけるものでなくてはならないのではないか？学生の心にとって御褒美となるような教育的行為はできないだろうか？学生と教師の信頼関係が成立し、親和的な人間関係の中でのびのびと授業ができないか？学生も教師も共に学びあえる時間が共有できないか？

筆者は以上の様な問題点を携えて授業の改善に取り組むことにした。

(2)私の授業改善

授業改善の対象として、筆者はひとまず「初等音楽科教育法」のなかのソプラノリコーダーの指導法を、以下のような理由から取り上げることとした。

・取り扱う楽器がリコーダーということで、(1)の①で示した人前での演奏を含み、なおかつ教育楽器でありながら充分に芸術性を持っており、生涯にわたって学ぶことも可能であること。

・少人数でもアンサンブルが可能で、歌唱などのように生来の素質、現在の状態、声種（ソプラノ、アルト、等々）などの制約を受けず、様々な教材の工夫が可能であること。

- ・(1)の②, ③で取り上げたような、教育的配慮が可能な題材であること。
- ・「初等音楽科教育法」ということで、免許を取得する者全員が履修するものであり、授業者にとっては年を追っての授業改善の積み重ねが可能であること。

また、(1)の①から③で取り上げた問題点に関しては、今までの授業の長所（というものがあればであるが）を生かしつつ、今回の実践に際して次のように配慮することとした。

①で取り上げた、人前での演奏に対する嫌悪感をなくし、むしろ快感として感じられる、「楽しく」感じられる指導法を編み出せないか？という問題に関して。

筆者は、始めから一人で、しかも人前で演奏するのは、少し無理があるのではないかと考えた。前述したような拒絶反応を経験したせいかもしれないが、ワン・クッションおく方が無理がないのではないかと考えた。それに持っていき方次第では、グループ演奏の間にいくらかでも個人的な演奏は可能になると考えられた。一人が無理ならグループで、なおかつ実技の場合、人前で演奏する機会が多ければ多程、場慣れしたり、また形成的評価⁶⁾を取り入れることが容易になると考えられるので、発表という言葉で気運れするならば、中間発表という名目で、毎時間少しではあってもグループでの発表を取り入れることにした。また試験は、学期の授業の一番最後に、発表会ということで取り組むこととした。また、毎時間カセット・テープレコーダー（ビデオでもよいだろうが、学生の希望としては、反対が多かった。）などの録音をすることにした。（教員の側では、授業が終わってからの授業研究に利用することも可能であるし、学生の側では、自分達の演奏の客観性に役立つと考えられた。）またグループは人数をほぼ設定しているが（6～7人）、柔軟に対応し、学生の希望を取り入れつつ、一人だけになる学生が出ないようにした。以上、大体は教官の側で計画を立てておくものの、その方法を取る場合には、十分に話し合い、双方が納得する形で（教育的な配慮をした上で、よくないこと、不可能なことは最初から除外した。）変化を交えつつ導入することとした。（万一、大要に変更の必要が生じた場合も、そこから話し合う準備はしておくこととした。）

②教科の目標、基礎、基本をどう「楽しく」体得するか？またその際に、できれば自他の評価を組み入れつつ、最終的には自分自身で自分の演奏を最良のものにしていく、そしてその演奏が学生自身の心を育み、生きていく上での支えの一つとなるような何かにまで高まる可能性を示唆するものを形成できないか？という問題について。

この問題に関しては、内容的には決して切り離して考えられることではないが、さしあたり便宜的に②-1. 教科の目標、基礎、基本をどう「楽しく」体得し、自他の評価を通して演奏を最良のものにするか？と②-2演奏によって心を豊かにしたり、心の支えをどう形成するか？という二つの問題に分けて検討し、のちに総括することとする。

②-1. 教科の目標、基礎、基本をどう「楽しく」体得し、自他の評価を通して演奏を最良のものにするか？という問題について。

まず教科の目標だが、音楽科については、平成元年⁶⁾、10年の学習指導要領の目標⁷⁾に示されている通り、また情操教育という言葉そのままに、最終的には「豊かな情操」⁸⁾を目指していることは、知られていよう。このことは、平成10年告示の小学校学習指導要領の中では一応次のように規定される。つまり「音楽性」（音楽に関する感覚、技能、理解の総称をさす。）、「音楽を愛好する心情」（児童の興味、関心、意欲、態度をさす。）、「音楽に関する感性」（音楽に対する価値判断のための感受力と直観力をさす。）といった三つのものの陶冶の結果として、上位概念としての「豊かな情

操」(音楽に対する知的、美的、宗教的、道徳的、なおかつ持続的価値感情をさす。)を養うことを目標としている⁹⁾、と。このことについて筆者は、以前より分かりやすく言うならば、よい音楽に接すると、いつでもよいな、と感じる心、音楽はよいものだ、と恒常的に思う心と解釈している¹⁰⁾が、これを授業に組み入れるとすれば、どうなるのだろうか？

あまりにも大きい問題であるが、この問題は音楽教育の本質に係わる問題であり、ここを避けては通れないように思い、筆者は「楽しさ」を目指すことが「豊かな情操」への第一歩、とさしあたり考えることにした。「楽しさ」なしには「豊かな情操」なし、という受け止め方で授業に臨むことにした。つまり学生にとっては、「音楽は楽しいな」が、「音楽ってよいものなんだな」の入口になるという考え方である。

次の基礎、基本をどう「楽しく」体得するかという問題には、筆者としては、次のように考えている。こういったグループ学習は、えてして学生の自由裁量に関する部分が多く、基礎、基本が無視されたり、また学生同士の感情の行き違い、などで時間が多く経過してしてしまうことも考えられる。だから、教材の中で段階を踏んだ基礎、基本を踏まえた必須の教材をプログラムの中の最初に組み入れることとし、呼吸法、タンギング、アンサンブルの完成方法については、常時指導する、また学生の注意を喚起する、と。

どう自他の評価を通して演奏を最良のものにするか？という問題について。

自他の評価ということについては、感覚的な部分をどう評価するか、演奏、学習の成果の客観的な評価という点で、音楽科における評価の在り方が極めて難しいとの見方が主流を占めているが¹¹⁾、筆者は客観と共に主観を大切に現在の評価の在り方に着目し、演奏の終わった段階で、自他共に5段階の評価(5が一番よい)を挙手によって、その場ですることとした。これは筆者が以前に参観した小学校で採用していた方法¹²⁾を参考にしたものであるが、毎回するので皆がリラックスして評価にあたるし、偶発的に口から出た言葉が演奏の本質をついていることも考えられた。また評価が終わった後の他の学生の形成的評価¹³⁾、総括的評価¹³⁾も、他の学生の演奏について言及しているようでありながら、じつは自分の演奏の捉え直しをしていることも考えられ、筆者の授業に採択することとした。筆者は、こういった評価を、発表にさきがけての教師による評価、励まし、個人指導(筆者は毎回発表の前に、学生の演奏を聴くことにした。)と組み合わせることによって、学生が自主的に演奏を最良のものにできるのではないかと考えた。

②-2 演奏によって心を豊かにしたり、心の支えをどう形成するか？という問題について。

②-1で取り上げた方法と連動するが、一通りの基礎、基本をマスターした上で、アンサンブルの楽しさ、美しさを追求したり、今自分の持っている技能を駆使して、楽曲を選び、自由な表現を満喫すること、そしてそれが教師や他の学生に肯定的に認められること、すなわち「楽しい」時を持つことは、大袈裟になるかもしれないが、これから学生が遭遇するであろう人生の様々な時々、ともかく一つの慰めの手段を提供することになるのではないかと考える。最終的に心の支えを形成できるかどうかは本人の自覚を待つしかないが、リコーダーを、いや音楽を、困った時の少なくともたくさんある選択肢の一つとして心のなかに入れておいてくれればこんな嬉しいことはない。ルネサンス期のリコーダーの清浄なアンサンブルの世界を他の人々の演奏を通して、共感的に理解することも可能であろうし、一人きりで寂しい時リコーダーを演奏したり、ことによれば、仲間達とリコーダーアンサンブルを楽しむこともできよう。ともかくそういった世界への扉を開けることが、筆者の授業の役割と考えるようになった。

以上便宜的に②-1と②-2を分けて扱ってきたが、結局この二つは一つのものであり、②-1を追求することで自然に②-2を追求することになる、というのが筆者の結論になった。

③演奏を指導するとは言っても、立派な教育的行為である。学生自身の心の発達に寄与し、自信をつけるものでなくてはならないのではないか？学生心にとって御褒美となるような教育的行為はできないだろうか？生徒と先生の信頼関係が成立し、親和的な人間関係の中でのびのびと授業ができないか？生徒も先生も共に学びあえる時間が共有できないか？という問題について。

筆者は結局学生のアイデンティティ（自己同一性・・・その人がその人以外のなにもでもないこと）を認めることからしか始まらないのではないかと、いう仮説を持つようになった。理由は簡単、そうすることによってしか、お互いの心が開かないし、開いても会話が成立しないからである。お互いをかけがえのない存在として認め、互いの貴重な時間を共通の目的の下で共有しているという自覚が、授業をかけがえのないものにする。アンケートによる授業への希望調査や意見交換、授業中の話し合い、「楽しく」音楽を学習するのだという共通理解の確認、発表会のあとの形成的評価、総括的評価を含んだ意見交換、すべては皆で良いものを作り出していくのだという方向へと誘われていく。こういった中で、学生、教官ともに互いを理解していくことが、互いの成長を促すことにはならないか？

またアイデンティティに関連してグループ名も大きな意味を持つと今回は考えた。思い思いのグループ名で、基礎、基本の課題をこなしつつ、自由に自分達の演奏を作り上げていく。筆者は良ければ良いで「合格」を、悪ければ悪いで「もう一度」との指針だけははっきりして、支援をしていく、こういった形で授業に臨むこととした。

以上仮説の域を出ない段階のものも含めて、①、②、③の解答とし、実践に移ることとした。

実践例

おおまかに、私の授業改善の流れを説明していくこととする。クラスは社会コースと養護学校教員養成課程の混合クラス、55名の履修者があった。前期30時間、2単位とのことであったが、実際に授業ができたのは、週1回の割合で11回であった。またその11回中、後半9回でリコーダーを取り扱った。授業は音楽教育の理論とリコーダーで90分であったが、割当から言うとリコーダーの学習は、全部で最長50分位であった。進め方としては、教官が前もって技術的な面での確認はしつつ、授業の始め10分から15分位をグループ練習にあてる。そのあとに録音付きで発表をし、すぐ挙手による評価、他の学生数名による形成的評価、総括的評価を加える。最終的に最後の発表へ向けて、完成させるよう注意を喚起しつつ、学習を終える。以上のように3回目以降の9時間分の一部をこの発表を中心とするリコーダーの指導にあてたのである。

以下に、授業の流れを表1として、グループ名、人数などと共に簡単であるが示すこととする。

ごく簡単にであるが、以下にその特徴的な流れを a. 基礎、基本の確認、b. 挙手による評価、c. 自由なアンサンブルへの歩みの順で説明することとする。

まず a. 基礎、基本の確認 についてであるが、授業の流れから言うと、3回目、もしくは4回目まで、だいたい課題の(10)¹¹⁾ くらいまで、ソプラノリコーダーだけのアンサンブルに限定し、リコーダーを吹く時の姿勢、腹式呼吸、タンギング、指使いなど発表前の個人指導を徹底して、基礎、基本の確認とした。(欲を言えばきりが無いが、ここまではどうしてもやっておいて欲しかった。)このことは、(10)が終了したあとでも継続し、毎時間の発表の前のグループ学習では、リコーダーを吹く時の姿勢、腹式呼吸、タンギング、指使いなど、リコーダーの基礎、基本の確認、新

しく導入した楽器の基本的な演奏法などを確認した。その際に、グループの演奏のみならず、必要ならば一人一人の演奏の確認を行った。

次に**b. 挙手による評価**である。これは、リコーダーを始めて3時間目から採用したものであるが、発表が終わったあと、「それでは評価行ってみましょう。」との言葉かけで始まり、「1, 2, 3, 4, 5。」という教官の言葉に合わせて評定を学生の方から挙手によって示して貰うのである。相対評価ではなく、絶対評価で、演奏がよければ毎時間、毎回5がでてでも差し支えない、との約束で始まった。5が最高によい演奏を示しており、本当はそれで充分であると筆者は考えていたのであるが、5がほとんど全員でなおかつさらにもっと上を望んでいるように思えたので「それではスペシャルをつけてもいい人？」との言葉かけをして生まれたのが全員スペシャルオール5である(表中の注5)。ここで興味深かったのは、筆者の感覚であると、自分の演奏に対する評価の方が、他の学生に対する評価よりも、もしかすると甘いかな?とと思っていたのだが、それは裏切られて、かえって厳しく、「指使いがうまくいかなかった、ソプラノとアルトのバランスが良くなかった」などと学生自身が次の発表に向けて、自己診断を下しているように思えた。こういったことが続いたことで、演奏はますますよくなっていった。毎回自他による評価を積み重ねること、が演奏に対して与えた影響は大きいと思われた。実際5回目以降はほとんど5という評定が主流を占めた。また、発表の前に10分から15分のグループ練習を入れていたのであるが、授業始業前から、今日の発表の曲目がわかるようになっていったのは、3回目以降くらいからであった。

次に**c. 自由なアンサンブルへの歩み**であるが、それは5時間目のグループ「3班」の『ふるさと』のオルガンの伴奏、グループ「なっちゃんフルーツMIX」の『ドナドナ』のオルガン伴奏から始まったように思う。まず4時間目くらいまでは、課題の内容がソプラノリコーダーのアンサンブルに限られていたので、他の楽器を入れる余地はなかった。しかし、5時間目くらいから学生の自由裁量の余地を認めたので、曲に合わせて、オルガンを入れることも可能になった。実際オルガンを入れてみると、オルガンの懐かしいような、もの悲しい響きは、曲にリコーダーだけでは表現しえない雰囲気をつけ加えていた。茨城大学教育学部のオルガンが足踏み式のオルガンであることも、影響したのであろうが(かなり古く一般に現在では入手困難である。)、『ふるさと』の演奏では、明治や、大正、昭和初期の教室が再現されたかのように感じられたし、『ドナドナ』の演奏ではオルガンのゆったりとした音型の繰り返しに子牛の歩みが象徴されているかに聞こえた。

こういった曲に合わせた、楽器の種類とアレンジは回を重ねる毎にますます豊かになっていった。表1の6回目以降の各グループの楽器の豊富さ。大学にあるどんな楽器を使ってもよいし、また持ってきてよい(ただし相談の上)との指示からかー実際多くの楽器を学生の前に並べたり、大きい楽器については、希望により案内した。ーオルガンから始まり、アルトリコーダー、ピアノ、鉄琴、すず、カスタネット、トライアングル、エレクトーン、ウッドブロック、グイロ、マラカス、ベース、アルトサクソ、ギター、枚挙にいとまがなかった。また7回目のグループ「なっちゃんフルーツMIX」の指揮、グループ「ソプラ並木高校」の『茶色のこびん』の歌、グループ「こがねむし」の『もみじ』のアルトリコーダーのパートの作曲、などそれぞれのグループの個性を反映して、9時間目の発表会へ向けて、ソプラノリコーダーを入れるという条件を満たしつつ、百花繚乱の観を呈していった。

発表会の演奏については、本当はそれぞれかけがえのないものであり省くことはできないが、紙面の関係上、内容の面でグループ「3班」の『もみじ』、グループ「ココリコーダー」の『上をむいて歩こう』、グループ「JJ'S」の『グリーン グリーン』、グループ「なっちゃんフルーツMIX」の『ルパン三世のテーマ』の4グループを取り上げて説明を加えたい。

まずグループ「3班」の『もみじ』であるが、前奏の鉄琴の音色がほんのりとあたたかくメルヘンチックな秋の夕暮れの美しさを醸し出している。また、輪唱の歌のおいかけこは、ピアノ、鉄琴、ソプラノリコーダー、アルトリコーダーに調和して一つの美しい絵のような世界を作り出していた。終わったあとの「ワー」という声や沢山の拍手の音がいかにこの演奏がよかったかを伝えている。学生の感想としては、「シンガーソングライターみたいだった。」とか「輪唱でずれた旋律をよく間違えなかった。」とかいう声が聞こえた。評価はもちろん全員がスペシャルオール5であった。輪唱とアンサンブルの調和という点で重要な発表になった。

グループ「ココリコーダー」の『上をむいて歩こう』であるが、このグループは教科書以外から、曲を選択した。鉄琴、ピアノ、トライアングル、歌、ウッドブロック、エレクトーン、すずと盛り沢山であった。情緒豊かに始められたピアノの前奏を、すずとソプラノリコーダーが受け取って、ソラシソミレというメロディーで繰り返し、段々に音楽が遠のくような形で次に鉄琴とウッドブロックに引き渡す。その後歌で「思い出す夏の日、ひとりぼっちの夜」を繰り返し、音楽は消えていく。余韻がなんとも言えずチャーミングで、大きな拍手が沸き上がった。いろいろなアレンジの工夫がみられたグループだった。筆者も坂本九さんの歌やアメリカで『スキヤキ』という曲になってヒットしたことなど、学生と話しながら思い出した。大きな感動を生んだ曲だった。曲自体の魅力も感じられて評価は全員スペシャルオール5であった。このグループの場合、印象的なメロディーの繰り返しをどう表現するかにチャレンジした点で評価される。音楽は繰り返す毎に、音量、形式などの点で拡大していくという考え方を覆し、静かになっていくなかでも、また優しく、囁くような中にでも、音楽は存在し、曲を盛り上げていくことができるんだと示していた。

グループ「JJ'S」の『グリーン グリーン』についてであるが、このグループはこの発表会を始める前から、充分個性的であった。筆者はグループごとにリーダーを決めているが、そのリーダーを中心に一つのミュージックグループができたようであった。アルトサクソフーン、ギター、ベースなどは「初等音楽科教育法研究」の授業では初めてお目にかかるものであったが、やっぱり学生の興味関心を考えると、頷けるものであった。このグループはグループ「ココリコーダー」の『上をむいて歩こう』とはうらはらに、静かなメロディーから始まった。ギター、ベース、ソプラノリコーダーが『グリーン グリーン』のメロディを静かに奏でる、次にアルトサクソフーンのカデンツ（独奏部分）を経てリズムカルにもう一度拡大して『グリーン グリーン』のメロディを繰り返す。録音を聴いてみると学生達の笑い声なども、沢山入っていたが、それは揶揄などを示す笑いではなく、新鮮な驚きを示すものであった。このグループは「初等音楽科教育法研究」にジャズの楽器を加え、なおかつ充分その楽器の良さを生かした点で評価される。評価はほとんどスペシャルオール5であった。

次にグループ「なっちゃんフルーツMIX」の『ルパン三世のテーマ』であるが、このグループの特徴は、なんといってもテーマを編曲したことであった。オルガン、シンバル、マラカス、すずが乗りのいいメロディー（ソプラノリコーダー）の効果音を示していた。本番は、一度間違えて二度目になんとかうまくいく、ということになったが、シンバルの入れ方はクライマックス的な手法を取り入れていたし、すずも雰囲気が出てよかった。曲が難しく、バラバラとの感が拭えなかったが、雰囲気も出ていたし、曲の編曲法という点では、群を抜いていた。評価は全員スペシャルオール5であった。

以上きわめて大づかみであるが、自由な「創作」を含めたアンサンブルへの歩みを示してみた。

私の授業実践の中で特徴的な、a. 基礎、基本の確認、b. 挙手による評価、c. 自由なアンサンプルへの歩みの順で説明を加えてみた。

(3) 検証的考察

筆者は、(1)今までの授業の反省で、①から③までの問題点を提示した。そして推測の域、また仮説の域を出ないながらも(2)私の授業改善でこの①から③までの問題に対して配慮、もしくは解答を与えてみた。今度は(2)で出した①から③までの問題の解答に対して、実践というフィルターを通した上で以下に検証的に考察してみたい。

①で取り上げた、人前での演奏に対する嫌悪感をなくし、むしろ快感として感じられる、「楽しく」感じられる指導法を縋み出せないか?という問題に関して。

筆者は(2)でグループ学習のなかでなら、人前で楽しい演奏ができるのではないかとの仮説を抱くに到り実践に臨んだ。この仮説に対しては、発表会の後に行ったアンケートではほとんど全員が楽しい発表だった、と述べていることを見てもわかるように、実証されたと考えられる。ただグループ学習をするのではなく筆者の言及したような方法でなら、人前での演奏も快感となるのではないかと考えられた。しかし、ただ演奏して「楽しい」ではなくてそこには学生達の努力の積み重ねがあった。以下に最初は憂鬱であった学生が発表を重ねるに従って、快感となってくる様子をアンケートから引用しよう。

はじめのうちはあまり乗り気ではなく、発表も憂鬱だったが、最後から5回目ぐらいから自発的に回りのグループにはりあう気持ちで闘志に火がついた。あまり事前に練習することをしなかったが授業の中で必死になって音をあわせたり、自分でもグループでもがん張れたのでとても楽しく、充実感のある授業でした。指導要領にある「楽しさ」はやはり自分達でやってみて、みんなの前でいいものを作ろうと努力する中で生まれてくるのだと思った。

筆者はかねがね研究のおもしろさは、もちろん努力や頑張りだけではないけれど、苦しみを通しての喜び (Freude durch Leiden.) と感じている部分が多かった。このように学生のアンケートでも接することが出来、興味深かった。一人で朝練をしたという学生も多かった。

②教科の目標、基礎、基本をどう「楽しく」体得するか、またその際に、できれば自他の評価を組み入れつつ、最終的には自分自身で自分の演奏を最良のものにしていく、そしてその演奏が学生自身の心を育み、生きていく上での支えの一つとなるような何かにまで高まる可能性を示唆するものを形成できないか?という問題について。

筆者は(2)で述べたように、筆者は音楽科の目標すなわち「豊かな情操」(すでに述べたように、筆者なりのわかりやすい言い方をすれば、音楽はよいものだ、と恒常的に思う心と解釈している)は「音楽の楽しさ」を入口にしている、と考える者である。つまり「音楽は楽しいな」が「音楽ってよいものなんだな」の入口になるという考え方である。どのアンケートにおいても、このことについては充分感じられるものであったが、ここでもこのことについて特に言及している学生の言葉があったので引用することにする。

みんなそれぞれ演奏を楽しんでいるのが伝わってきて、とてもよい発表会だったと思う。回を追うごとに色々な楽器との合奏になり、どんどん上達したと思う。同じ曲でも班によって違った雰囲気になるのを聴くのも楽しかったし、いいことづくめだ。やっぱり音楽は楽しい。

こうして育てていった「豊かな情操」であるが、普通に考えると大変そうな基礎、基本も、グループ発表の場に入れ込んでいくことで、難無く乗り越えていた。(実際、表1の1, 2, 3時間を見ても、皆大体5の評価で通過しているのを見てわかるように、回を追うごとに極めて確実に上達していった。) また自他の評価を組み入れつつ、最終的には自分自身で自分の演奏を最良のものにしていくことは、誰も否定しないだろう。演奏と挙手によるその場での自他による評価が、相乗的に次へのステップへと導いていたし、最後の発表会へ向けて、演奏をより高度にしていっただのは、どの学生も認めるところであった。(実際アンケートでも全員が上達していったことはほとんど全員に肯定されていたし、筆者も演奏の発表を聴く分には確実にそう言えた。) しかし、演奏が学生自身の心を育み、生きていく上での支えの一つとなるような何かにまで高まる可能性を示唆するものを形成できないか? という問題に対しては、やはり何年か後にアンケートを試みなければならぬであろう。筆者としては、今のところ「大学での思い出ベスト5」とアンケートに書かれたことを、心の支えにしなければならないかもしれない。ただ、「音楽を楽しむ」という事が体験できたことは、本当によかったと思う。」と学生のアンケートにあるように、「楽しさ」の経験の記憶が、この授業の眼目になり、未来への足掛かりになるのかもしれない。

③演奏を指導するとは言っても、立派な教育的行為である。学生自身の心の発達に寄与し、自信をつけるものでなくてはならないのではないか? 学生の心にとって御褒美となるような教育的行為はできないだろうか? 生徒と先生の信頼関係が成立し、親和的な人間関係の中でのびのびと授業ができないか? 生徒も先生も共に学びあえる時間が共有できないか? という問題について。

このことについてはすでに筆者は感覚としては十分に感じている。証拠としては、まず皆(教師も学生も両方入っている)で揃ってグループ学習が「楽しく」できたこと、毎回皆が協力して課題を少しずつこなして、一步一步上達していったこと、録音ではあるけれど、皆の緊張や、期待が痛いほど感じられること、触ったことのない楽器を友達が演奏した時のざわざわとした様子は決して、ふざけではないこと、これらすべてが挙げられよう。筆者は(2)でアイデンティティのことを言及したが、まずこのことは実践してみればはっきりとわかった。まずお互いをかけがえのないものとして認め、皆が調和して一つのもので作り出そうとする。ここには学生も教師もない、人間として支援する、また楽器を提供する、また場を提供する。「創造」の場として、また真の学びの場としての教室が存在する。このことについて異論の余地はないと思う。ここには真の意味での「楽しさ」があるように思う。以上極めて簡単ではあるが、検証的に考察を述べてみた。

(4) 今後の展開

筆者は大学で授業をする者として、本来は難しいことを分かりやすく、また親和的に授業をしなければならぬと感じている一人である。最初に述べたように、自己満足的な授業展開を独善的にしてはならないし、前もってした授業研究が縛りになることなく、柔軟に展開できるような心の準備もしておかなければならない、と感じている。

学生と一緒に精一杯充実した、「楽しい」学びができれば、これが筆者の授業に対する思いである。「音楽の楽しさ、それはまず授業をする教師自身が『楽しい』と心から思えるようになること」¹⁵⁾との言葉を待つまでもなく、今回の授業で筆者は学生と本当に「楽しい」時を過ごせたように思う。最後に学生達と発表をする時の私のモットーを述べて終わりたい。

教師も子どもとともに、共同体の一人として文化の発信者となろう¹⁶⁾！

注

- 1) 浜野政雄『音楽教育学概説』（音楽之友社，1991年），pp.10-11.
- 2) 文部省『小学校学習指導要領』（以下『元年版要領』と略記）（1989年），pp.72-85.
- 3) 平成10年12月告示『小学校学習指導要領』（以下『10年版要領』と略記）（時事通信社，1999年），pp.64-71.
- 4) 山口文子「小学校音楽科『つくって表現』に関する研究2）」「茨城大学教育実践研究」第18号，（茨城大学教育学部附属教育実践研究センター，1998年），pp.76-78.
- 5) 指導過程の途中で、目標の達成状況や生徒のつまづきに関する情報を、教師と生徒にフィードバックする評価。生徒は自分の学習状況を知ることができるし、教師は指導法の修正や打つべき手を考えることができる。（教員養成大学音楽教育研究会編『新編音楽科教育法』（以下『新編教育法』と略記）（音楽之友社，1997年）），p.48.
- 6) 『元年版要領』，p.72.
- 7) 『10年版要領』，p.64.
- 8) ちなみに音楽教育が情操教育という発想は日本独自のもので、北米にはこういった発想はない。（小川昌文「音楽教育の新哲学<プラクシス>をめぐる論争」『日本音楽教育学会第30回大会プログラム発表レジュメ』（日本音楽教育学会，1999年），p.9.
- 9) 『新編教育法』，pp.9,10.
- 10) 山口文子「小学校音楽科『歌唱』に関する研究」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』第49号，（2000年刊行予定，印刷中）.
- 11) 『新編教育法』，p.49.
- 12) 猶原和子氏による研究授業。（第61回教育実際指導研究会，於お茶の水女子大学附属小学校，1998年10月29日。）
- 13) 一定期間の指導が終わってから、評価するもの。（『新編教育法』，p.48.）
- 14) 『新編教育法』，p.131.
- 15) 小原伸一「音楽授業の『楽しさ』とは」東京芸術大学音楽教育研究室創設30周年記念論文集編集委員会編『音楽教育の研究』（音楽之友社，1999年），pp.467-472.
- 16) 猶原和子「音楽で表現すること」佐伯胖他編『フレネの教室1 学びの共同体』（青木書店，1996年），p.34.